

# 川村郁の足跡を訪ねて

## —— 僻地教育への献身 ——

木 鎌 耕 一 郎

はじめに——調査に至る経緯

1. 生い立ちから受洗まで
    - 1-1. 幼少期
    - 1-2. 新しい女性の生き方
    - 1-3. 受洗
  2. 未知の開拓地へ
    - 2-1. 善光寺平を知った契機
    - 2-2. 招きに応える
  3. 開拓地の生活——エピソード
    - 3-1. ベビーオルガン
    - 3-2. 手袋を編む
    - 3-3. 無医村
  4. 「手記」
    - 4-1. 執筆の時期
    - 4-2. 執筆までの心の変化
  5. 僻地教育を望んだ動機
    - 5-1. カトリック信仰
    - 5-2. 津軽の教師として
    - 5-3. 病と死の意識
  6. 再び山へ——最後の献身
- 結び

### はじめに —— 調査に至る経緯

川村郁という人物については、一般には、その存在すら知られていない。津軽地方の開拓地で、教育から見放された子供たちに生涯を捧げたこの女性の記憶は、今や数少ない縁の人々の心の片隅に、わずかな居場所を得ているに過ぎない。川村郁は死後、地元紙で「第二の蟻の町

のマリア」と呼ばれたこともあった<sup>1</sup>。しかし、東

<sup>1</sup> 川村郁は、1963年11月1日に「ルイ・クパール賞」という賞を贈られたが、これは日本では「蟻の町のマリア」北原怜子に次いで二人目の受賞であった。受賞時の記事には次のように説明されている。「黒石カトリック教会のジョリコール神父が昨年カナダに帰国したが、テレビやラジオで“けいけんな日本人”として川村さんを紹介したのが、たまたまモントリオールのブレブック学院教授ルイ・クパール夫妻の耳にはいった。クパール夫妻は神学生に講義するかたわら、アジア、特に東南アジアに興味を持ち、数回にわたって旅行し、風俗、生活を研究しているが、社会のために

京を拠点に活動し、多くのメディアが社会問題とともに注目した北原怜子と、地方の水道も電気もない僻地で人知れず働いた川村郁の知名度には、雲泥の差がある。日本のカトリック教会においてもほとんど顧みられることなく、記憶は風化し、今や忘れ去られようとしている。

筆者が川村郁の名に出会った契機は二つあり、いずれもインターネット上から得た情報による。最初の出会いは、5,6年も前のことになる。青森県内の観光案内を調べていたところ、平賀町<sup>2</sup>のホームページに、八甲田山麓の山間にある「マリア清水」という名の湧水が名所として紹介されていた。「マリア」という名称から、キリスト教との関連を推察し、何かのついでに十和田湖を横切り国道102号線を平賀町側に下り、現地に足を運んだ。

温川温泉付近から右手に上る細い山道をしばらく行くと、左手に湧水が流れており、草の生い茂った斜面に白いマリア像が祀られていた。湧き水を受けるコンクリート製の苔むしたボックスには、お賽銭のつもりだろうか、小銭が沈んでいた。

右脇には看板があった<sup>3</sup>。看板の設置者がカ

トリック教会とあるため、関心を抱きメモをとった。しかし、結局それ以上調べることなく時間が過ぎていった。文中に現れる「川村郁」という人物については、かつての伝道士ではないかと想像した程度で、湧水のことも川村郁の名も、しばらく忘れていた。

2007年春に、二回目の契機が訪れた。それは、たまたま黒石市のホームページを見ていたときである。同市教育委員会が発行した『黒石人物伝』という書物の文章が、教育委員会文化課のサイトで全文公開されていた<sup>4</sup>。そこに紹介されている二十一人の人物の中に、「クララ川村郁」の名があった。その紹介文によって、筆者は初めて、川村郁なる人物が僻地教育に身を捧げた教師であることを知ったのである。

『黒石人物伝』の参考文献には、1985年発行の『平賀町誌』（平賀町誌編纂委員会）<sup>5</sup>と手記「山の子らのために」（川村郁）の二件のみが示されている。前者の文献は容易に手に入ったが、後者の手記はどこに存在するのか不明であった。『平賀町誌』には、善光寺平にかつてカトリック教会建てられたことが簡単に紹介されているのみで、『黒石人物伝』における川村郁の人物像の情報源が、もうひとつの文献「手記」に依存していることは明らかであった。そのため、黒石市教育委員会文化課に「手記」の所在を問い合わせ調べてもらったが、残念ながら既にそのことを知る職員はおらず、所在は不明であるとの返信があった。

手掛かりを得る望みが絶たれたため、調査を諦めかけたが、その後思いがけず「手記」入手する道が開けた。川村郁のことについて八戸のカトリック塩町・鮫町教会の主任司祭である首藤正義神父に相談したところ、神父は弘前市にあるオタワ愛徳修道女会のシスター熊谷みわ

貢献した人たちに賞を与えていた。昨年十一月一日の諸聖人の祝日にケベック外国宣教会にいるジョリコール神父をたずねて、いまはなき川村さんに「ルイ・クパル賞」を贈った。」（『東奥日報』1964（昭和39）年5月1日付）

<sup>2</sup> 平賀町は、2006年1月1日に尾上町、碓ヶ関村と合併し平川市となった。2007年9月現在、平川市HPから旧平賀町HP（<http://www.city.hirakawa.lg.jp/hiraka/>）を見ることができる。

<sup>3</sup> 看板には次のように記されている。「マリア様は神様イエズスの母として世界中どこへ行っても知られ、愛されています。一八六六年、フランスのルルドという所で、マリア様はベルナデッタという少女の前に現れました。そこは山中で水の無い所でしたが、マリア様はその少女に土を掘るように言われました。するとそこから突然水が湧き出てきて、今でもその信仰の泉では、清らかな水が流れ続けています。善光寺平で信仰の種を蒔いた川村郁先生が、ここに水が湧き出ているのに気づき、山に来る人の喉と心を潤すこの水辺にマリア様の像を建てたいと強く望み、ルルドの洞窟に現れたのと同じマリア様の像を建てました。皆様もこのマリア様に保護され、祝福されますよう

に。平成元年八月十五日 カトリック教会」

<sup>4</sup> 黒石人物伝編集委員会編『黒石人物伝』黒石市教育委員会1992年（121-132頁）及び、黒石市教育委員会文化課HP（<http://www.7-dj.com/kurobun/>）を参照。

<sup>5</sup> 平賀町誌編纂委員会『平賀町誌』平賀町1985年

子氏に連絡をとり、事の経緯を説明し、「手記」の所在調査を依頼して下さった。間もなくシスター熊谷は、「手記」に覚えがある弘前教会の信徒を探し当てて下さった<sup>6</sup>。さらにシスター熊谷は、川村郁の従弟にあたる今井則三氏を紹介して下さった。今井氏は、1958（昭和33）年に弘前大学教育学部を卒業後、1959（昭和34）年4月1日から1960（昭和35）年3月31日まで善光寺平の分校に勤務していたという。今井氏は、善光寺平に建てられたカトリック教会で受洗した一人である<sup>7</sup>。氏の案内により、川村郁の遺族や善光寺平開拓地を訪ね、取材をすることができた。

「手記」に加え、埋もれた諸記録や証言を得たことで、川村郁の人生の軌跡が少しずつ浮かび上がってきた。まだ細かい点で情報収集を要するが、さしあたり本稿では、「手記」と若干の資料とこれまでの取材に基づき、現時点で知られた川村郁の姿を、彼女が生きた時代状況とともに出来るかぎり正確に辿ることにより、彼女が

何故、僻地教育を望み実践したか、その動機を探ることを中心的な課題としたい。また、開拓地の人々と共に生きる姿を通して信仰の種を蒔いた彼女のキリスト者としての生き方に光を当て、我々がそこから何を学ぶことができるかについて考えてみたい。

## 1. 生い立ちから受洗まで

川村郁がどのような幼少期や青年期を送ったかについて直接知る手がかりはまことに少ない。しかしながら彼女が生まれてから教職に就くまでの期間は、太平洋戦争を挟む日本の激動期にあたる。そのため、時代の影響という側面から、彼女がどのような成長過程を経たかを垣間見ることはできるであろう。本章では、幼少期から高等女学校時代、教員生活に入りカトリックの洗礼を受けるまでの川村郁の姿を、彼女が生きた時代状況と重ね合わせ、描いてみたい。

### 1-1. 幼少期

川村郁は1927（昭和2）年、東津軽郡蓬田村において、父の文行、母のタマの間に六男四女の長女として生まれた。父は教員であり、兄2人も師範学校に入っており、教員一家といつてよいであろう。「手記」の中で彼女が自らの幼少時代について触れている箇所は、生前の父の記憶とともに記された次の文章だけである。

津軽半島の中程にある漁村の小学校長だった父は夏は水泳、冬はスキーとよく子供たちを連れて歩いたものだ。その頃長兄は、青森師範の付属小学校に入っていたので青森市の伯母の家に寄宿していたが、両親の元で育った、十才の兄、九才の私、七才の妹、五才の弟は日曜日などみんなスキーをはいて父の後にしがいがい、裏山にすべりに行つたものだ。師範学校時代からスポーツの選手だった父は、野球のチームを作つたり、冬は毎年のように、裏山でスキー大会をやつたりした。四

<sup>6</sup> 「手記」は既に廃刊となった「黒石民報」紙に連載されていたもので、弘前教会信徒の太田トキさんが覚えておられた。太田さんはかつて、この「手記」を仙台教区本部宛てに送ったことがあったという。しかし太田さんの手元には既に「手記」はなかった。筆者が「手記」の所在を探していることを伝え聞き、太田さんはかつての友人で故人の佐々木みつ氏のところにコピーがあるかもしれないと思われ、問い合わせた。佐々木みつ氏が川村郁と親友であったことを知っておられたからである。太田さんから連絡を受けた故佐々木みつ氏の御子息は、母の遺品の中に「手記」のコピーを見出した。太田さんはそのコピーに表紙を付け、綺麗に綴じた上で、筆者に渡して下さった。

<sup>7</sup> 今井則三氏は、かねてから弘前教会で公教要理を学んでいたが、善光寺平で勤務していた1959（昭和34）年12月27日に善光寺平に建った教会でケベック外国宣教会のジャン・ギ・デュメン神父より受洗している。代父は善光寺平の開拓者の中心的存在で、やはり善光寺平教会で受洗した葛西万太郎氏であったという。氏はその後も青森県内の小中学校教員として務めるとともに、ケベック外国宣教会の司祭たちと津軽地区のボーイスカウトの育成に尽力している。今井氏の母ちねが川村郁の母タマの妹に当たる。

年生の時、スキー大会で廻転、かつ降とも女子の部では一位ばかりとついていた私が、みかん拾いの競技でスタート間もなく転倒してしまった。起きあがつてみたら、友達はずうと下をすべつて行く。どうせビリだと思つて、一つより拾われないことになつているみかんを、三つも四つも拾つてすべり下り、父にうんと叱られた。二十年も昔のなつかしい思い出が、つい昨日の様に、甦り、この子供たちにもあんな楽しいスキー大会を味わせたいものと、子供たちに話して見たら、みんな大喜びで、大賛成。早速 PTA 会長さんの所へ相談に行つた。<sup>8</sup>

スキー大会女子の部で常に一位をとっていたとあるように、幼少時の川村郁は、活発で体力的に恵まれ、健康児として育った様子がうかがわれる。『黒石人物伝』では、川村郁の性格を「6男4女という兄弟姉妹の多い家族の中で育ったせいか、誠実でやさしく世話好きな反面、思ったことは努力して最後まで成しとげる気の強い女の子でもあった」<sup>9</sup>と記している。

上記の引用文に登場する「五才の弟」とは、現在黒石市に在住している五男の川村昭男氏のことである。筆者が川村昭男氏のご自宅にうかがい、子どもの時分の姉上の性格についてお尋ねした際、昭男氏は「じゃっば」という表現を使われた。津軽地方の家庭料理「じゃっば汁」というアラ汁はよく知られているが、津軽弁「じゃっば」はもともと「雑把」を意味するそうである。人間に対しては女子に対してのみ用られ、「お転婆」や「じゃじゃ馬」、「きかん子」などの意味を指すという。スキー競技で、みかんをルールより多く拾い父に叱責された上記のエピソードには、その「じゃっば」ぶりがよく示されている。活発で健康に恵まれたこの頃の川村郁にとって、将来自分の身を襲う病魔を予想

することはできなかったであろう。

## 1-2. 新しい女性の生き方

教員だった父は1941(昭和16)年に亡くなり、その後家族は、母の実家がある黒石市山形町に居を移している。弟の昭男氏によると、父の死後は母タマの年金が家族の主たる収入源であったという。また、父が亡くなった際、母タマのお腹には末の子が宿っていたという。

父の影響であろう、二人の兄は師範学校に通い、川村郁も1944(昭和19)年に弘前高等女学校を卒業し教員となった。家庭環境から教育者をめざしたと考えることは自然であろう。ただし、この間の事柄について「手記」には何も触れられていない。昭男氏所有のアルバムに弘前高等女学校時代の写真が数枚残っているのみである。とはいえ、父の死、高等女学校在学、卒業、教員生活の開始という一連の出来事が、すべて太平洋戦争の期間に集中していることを考え合わせると、特有な時代状況の中で青年期を過ごしたことがうかがわれる。

川村郁が通った弘前高等女学校の前身は、1901(明治34)年4月に開校した青森県第一高等女学校(同年5月に青森県立第一高等女学校、1909年に県立弘前高等女学校と改称)である。終戦後の1948(昭和23)年に新製の県立弘前女子高等学校に移行、翌年には男女共学化して県立津軽高等学校、翌々年に弘前中央高等学校と名称を変えている。2000(平成12)年に創立百周年を迎えた伝統校である<sup>10</sup>。

全国的に見ても女子教育の草分けと言えるこの弘前高等女学校は、津軽地方の女子教育にとって希少な位置づけにあったといえる。第一次大戦後、全国的に女子教育への関心が高まる中、各地に高等女学校、実科高等女学校が多く設立されたが、昭和初期でも青森県内の高等女学校は八戸、青森、弘前の三校より増えず、東北地方の中で女子教育の普及は遅れていたとい

<sup>8</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年4月15日付

<sup>9</sup> 前掲『黒石人物伝』(122頁)

<sup>10</sup> 青森県立弘前中央高等学校 HP に紹介されている沿革 (<http://www.chunan-w.asn.ed.jp/~chuo/page42.pdf>) を参照した。

う<sup>11</sup>。当然入学倍率は高く、より高い教育を望む女子の多くが高等女学校への進学をあきらめなくてはならなかったのである。

昭和10年代には、国家主義的な教育の波が押し寄せる。1939(昭和14)年4月22日には、青少年向けに国家と天皇に対する忠誠を強化すべく「青少年学徒ニ賜リタル勅語」が發布<sup>12</sup>され、1943(昭和18)年10月12日には、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」が閣議決定され、戦時勤労動員が徹底された<sup>13</sup>。

川村郁が弘前高等女学校に在学したのは、まさに戦時体制の軍国主義教育が最高度に推し進められていた時期にあたる。津軽の伝統的な女子教育の現場で彼女が経験したものは、各種教科の学校教育というよりは、同級生たちとともに額に汗して働いた勤労動員の日々であったと推測できよう。

川村郁が弘前高等女学校を卒業し教員となってから一年余りで、終戦を迎える。周知のように終戦による国家主義の崩壊は、教育界に大変革をもたらした。抑圧的な戦時体制から一転、新しい民主的な教育への方向転換は、川村郁の教師としての生き方にも何らかの意識の変化をも

たらしたにちがいない。

ところで弘前高等女学校は、石坂洋次郎(1900-1986年)による流行小説『青い山脈』の舞台となった学校としても知られている。1990(明治33)年に弘前市で生まれた石坂洋次郎は、大学卒業後、1925(大正14)年から翌年までの一年半、弘前高等女学校の教師として勤務しており、戦中の1943(昭和18)年には疎開で弘前に住み、終戦後も数年間は春と秋を弘前で過ごしていたという<sup>14</sup>。

『青い山脈』は戦後間もない1947(昭和22)年の6月から9月にかけて朝日新聞で連載された小説であり、川村郁が弘前高等女学校を卒業してから三年経た時期に当たる。この小説は、古い因襲の残る地方都市を舞台に自由な思想や恋愛、男女同権を謳う若者たちが繰り広げる物語であり、相当な人気を博したとのことであるから、川村郁も教員生活を送りながら、地元に縁のあるこの小説に親しんだのではないだろうか。

石坂洋次郎は『青い山脈』の執筆意図について「私は、この小説で地方の高等女学校に起った新旧思想の対立を主題にして、これから日本国民が築き上げていかねばならない民主的な生活の在り方を描いてみようと思ったのである」<sup>15</sup>と語っている。

ここで言われる「新旧思想の対立」は、当時の教育界においても同様に見られたであろう。戦時中の抑圧体制から民主化の波が押し寄せ、働く女性の意識に封建的な因習から脱却しようとする志向が高まった時代の空気を、若い川村郁自身が敏感に感じ取っていたことは想像に難くない。

実際に彼女が選択した「僻地の学校で働く」という生き方は、当時としては新しい女性の生き

<sup>11</sup> 青森県の女子教育と高等女学校の歴史については、青森県教育史編集委員会編『青森県教育史記述篇第2巻』青森県教育委員会1974年(39-45頁, 289-293頁)を参照。同書によると昭和3年の高等女学校数は、山形県10校、宮城と秋田が9校、福島と岩手が7校設置されていたが、青森県は3校であった(同書289-290頁)。

<sup>12</sup> 同上(295頁)を参照。この勅語は戦争の時代を迎え、国力の維持発展が「汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ」とし、若者たちに国家理念を徹底して教え込むものであった。これに伴い高等女学校では昭和17年に数学と理科について「産業、国防ノ観点ニ立チテ指導スベシ」とされ、外国語が必修から外されたという(295頁)。

<sup>13</sup> 同上(295-296頁)を参照。昭和18年に高等女学校は中学、実業学校とともに中等学校に統一されている。上記の閣議決定に基づき全中等学校の内容は「精神訓練ノ徹底、国防訓練ノ強化、生産ノ増強、職業指導ノ徹底」に集中し、女子生徒に対しては「国民保健就中救急看護ノ訓練ノ強化」が計られたという。これらは全て川村郁が高等女学校在学中の動向である。

<sup>14</sup> 小野正文『北の文脈中巻 青森県人物文学史』北の街社 昭和50年(72-79頁)を参照。

<sup>15</sup> 石坂洋次郎『青い山脈』新潮社 昭和48年57刷(初版は昭和27年発行)に所収されている平松幹夫による解説(296-297頁)を参照。

方であったといえる。川村郁が「僻地の学校で働く」という希望を母に相談したのは、「手記」によれば1951(昭和26)年であったという。僻地教育に対する旧態依然としたイメージが残っていた当時、母は娘の希望に取り合おうとしなが、川村郁も自分の決意を諦めようとしなが、母と娘の対立は、石坂の言う「新旧思想の対立」という時代精神を反映している。

善光寺平に行くまで私がへき地教育の重要性を真剣に考えはじめ「自分の弱い力では、とても完全にやれることはできないまでも、でき得る限りの努力と、情熱で、恵まれない子ども達のために献身しよう」と、母に相談をもちかけたのは、昭和二十六年ごろ、まだ教育界でも「栄転」だとか「左遷」だとかいう言葉が通用しへき地にやられる先生は、「成績の悪い教員。老令の教員。何か事故を起した教員」の「左遷」と一般の常識とされていたころだったので、母はこの話にまっとうから反対した。「何も事故を起こしたわけがなし、女の先生が、そんな山奥の開拓地などへ行つたら、世間の人たちはどう思うの、川村の娘が、何だつて又あんな山奥へ行つたんだろう、とうたがいの目で私をみるだろうし、肩身が狭くて町の中もあるけない」と理解あるいつもの母に似ず冷たい返事だった。母にしてみれば、むすめの身を案じての、親心からでた言葉であろうし、一家の経済的支柱であつた私にそんな辺地に行かれてしまつたら何か頼り気ない不安な気持ちになつたのでしょう。機会あるごとにへき地教育の重要なことや、恵まれない子どもたちのことを話してやつても(何でも相談にのつてくれ、理解のある母ではあるが)このはなしだけは、耳を傾けようとしなかつた。「ああ、又いつものくせが始まつた。」とはなしを別の方にそらしてしまおうとする母だった。母さん、私が学校にいて事故を起こしたことがある? 悪い教員であるかどうか、村の人たちにきけばわかる…へき

地に行つてうんと働らき、子どもたちが少しでも幸福になり開拓地の人たちのためになつたら、それでいいじゃないの。世間の噂が、何でおそろしいの。肩身が狭くて道路も歩けないつていたつて、それは一時的なこと。私は決して人に後指さされるようなことはしないから、一時は肩身の狭い思いをするかも知れないけれどそれは時が解決してくれることよ。」と、私は真剣にいつた。<sup>16</sup>

父の死を経て、高等女学校に通い、父や兄と同じく教育者への道を歩みはじめた川村郁の内面の記録は存在しない。しかしその約十年間は、戦中戦後の激動期と重なり、教育界においては大きな方向転換が見られた時期にあたる。この時期を経て彼女は、戦後の新しい女性の眼差しをもって、「教育者」として自分が何をしうのか、何をすべきかを内省し、父や母の世代の意識や慣習を乗り越え、実践に移そうと計画していたのではないかと考えられる。

### 1-3. 受洗

川村郁がカトリックの洗礼を受けたのは1951(昭和26)年のことである。ケベック外国宣教会のフォールテン神父により受洗している。受洗の動機は、母タマの回想によると「兄の感化」であつたという<sup>17</sup>。弟の川村昭男氏にこの兄のことを尋ねると、それは亡くなった四男の「悌司(ていじ)」であるとのことであつた。

昭男氏のお話では、四男悌司は大正15年生まれで、亡くなる三、四年前に弘前教会で洗礼を

<sup>16</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年3月11日付

<sup>17</sup> ルイ・クパール賞受賞を伝える「東奥日報」紙の記事に、「母タマさんの話」として次のように記されている。「あの子の父、兄も教師でいわば教育一家だった。兄の感化を受けてクリスチャンになった。善光寺平にいくのは私らは反対したが、“貧しい子らを私が見なければだれが見るでしょう”といって聞かなかった。それでも善光寺平にいたときは“しあわせだ”と口ぐせのようにいつていた。自分の思うようなことができてあの子も本望でしょう。あまり突然の賞にびっくりしています。」(1964(昭和39)年5月1日付)

受けたようであるが、はっきりした受洗年はわからないとのことであった。ちなみに、昭男氏は五男であり、上の二人の兄は師範学校に通っていたが、卒業するかしないかの頃、結核で亡くなった。その二人を含め、昭男氏以外の男兄弟は皆、結核で亡くなったという。昭男氏ご自身もかつて結核を患ったが、幸いにも回復したという。

筆者は弘前教会の主任司祭でケベック外国宣教会のデュベ・ジル神父に、洗礼台帳を調べていただいた。川村郁が受洗したのが1951年であるから、それ以前の数年間の受洗者の中に川村悌司の名があるはずだから調べて欲しいという大変乱暴なお願いであったが、デュベ神父は快く洗礼台帳に一頁ずつ目を通し、その名を見つけ下さった。

洗礼台帳によると、川村悌司は1926年4月13日に黒石市山形町に生まれ、受洗年月日は1949年12月24日であった。霊名はマルコ、代父はヨハネ小田桐<sup>18</sup>とあり、ドミニコ会のデルエン神父から洗礼を受けている<sup>19</sup>。

悌司の受洗年である1949年は、ちょうど青森

県の司牧担当がドミニコ会からケベック外国宣教会に移管された年にあたる。現在青森県は仙台教区に属しているが、かつては函館に司教座があり、函館代牧区に属していた。当初の司牧担当はパリ外国宣教会であったが、1930（昭和5）年にカナダ管区ドミニコ会に担当が移管した。青森県の所属が仙台教区となったのは、司教座が函館から仙台に移った1936（昭和11）年である。そして終戦後の1949（昭和24）年に、司牧担当はドミニコ会からケベック外国宣教会に移管されることが決まった<sup>20</sup>。つまり、弘前教会における川村悌司の受洗年は、ドミニコ会が青森県を担当した終盤の時期にあたる。

洗礼台帳には、川村悌司が亡くなった年月日のメモもあった。1951（昭和26）年10月9日である。筆者は、この年月日に注目した。1951年とは、川村郁が洗礼を受けた年にあたる。同じくデュベ神父に見せていただいた洗礼台帳の川村郁の欄には、受洗の日付が12月24日となっている。つまり、川村郁は兄の悌司が亡くなった1951年10月からわずか二ヶ月余りのクリスマスに、洗礼を受けたことになる。

川村郁が、生前の兄のどのような言葉や行動に感化されたのかは、既に知る由もない。しかしこのように川村郁の受洗に至る時間軸に兄の受洗と死を重ね合わせてみると、彼女の受洗の動機が「兄の感化」とよるといふ母タマの言葉を、よく理解することができる。兄の死後、二ヶ月余後に洗礼を受けたことは、受洗という行動に踏み出す直接の引き金が「兄の死」だったことを示している。

## 2. 未知の開拓地へ

後述のように、青森県には当時、全国的にも

<sup>18</sup> 今井則三氏によると、この「ヨハネ小田桐」とは、黒石カトリック教会創立当時の長老で2007年4月に亡くなられた小田桐真彦氏であろうとのことである。

<sup>19</sup> ドミニコ会のデルエン神父については、小野忠亮『青森県とカトリック 宣教百年史』百年史出版委員会1982年に詳しく記されていた。それによると「デルエン師（Derouin 1901-1971）一九七一年（明治三四）年二月一七日カナダ国に生る。…中略…一九二九（昭和四）年九月二三日宣教師として来日。一九三三（昭和五）年一月盛岡四ツ家教会主任。その後一時、十和田教会、さらに弘前と青森両教会を受け持った後、一九三三年（昭和八）年、青森教会の主任となり、戦争中は、青森と仙台、浦和に収容される。戦後一時カナダに帰国して休養の上、日本へ再来、一九五一（昭和二六）年まで弘前教会主任。ケベック宣教会司祭と交替し東京に移り、三年の準備を経て、新宿に「学生の家」を開設。…中略…一九七一年（昭和四六）年十一月二四日、中野の慈生会病院で聖母賛歌をとなえながら死去。（七〇歳）。」とある。これによると青森県に縁のあったデルエン神父は、川村悌司が亡くなった1951年を最後に、東京に移っている。

<sup>20</sup> この間の経緯については、前掲『青森県とカトリック 宣教百年史』（104-106, 145, 166頁）及び、小野忠亮編著『北日本カトリック教会史 人物・教会・遺跡』中央出版社 昭和45年（92, 165頁）を参照。

僻地校の割合が非常に高かった<sup>21</sup>。数ある僻地の中で、川村郁は善光寺平開拓地に赴任することになる。彼女がどのような経緯で、善光寺平に関する情報を得て、そこに赴任することになったのかを、本章では整理しておきたい。

### 2-1. 善光寺平を知った契機

川村郁が善光寺平に赴任した経緯に関して、幾つかの資料には、ある新聞記事の存在が指摘されている。川村郁が死後カナダから「ルイ・クパール賞」を贈られたことを伝える1964（昭和39）年5月1日付の「東奥日報」紙の記事は、川村郁を次のように紹介している。

三十年秋東奥日報紙上に黒石市から約三十八キロ離れた開拓地善光寺平の主婦や子供たちが学校があっても教師がいなくて困っていることが報道された。当時は同市の上十三小学校に奉職していたが、このことを知った川村さんは反対する母親（六二）を説得山に登った。<sup>22</sup>

この記述によれば、川村郁が「三十年秋東奥日報紙上」の記事で善光寺平開拓地の窮状を知ったことが、赴任する契機とされている。同様の記述は、他にも見られる。前掲の『黒石人物伝』には、次のように記されている。

一九五五（昭和三十）年秋、東奥日報紙上

に、黒石市から三十八キロも離れた開拓地善光寺平の主婦達が、学校はあっても教師がいなくて困っていることが報道された。当時六郷第二小学校に勤務していた川村郁は、貧しい子らを教育する者は私のほかにはいないとひそかに思い、以前から胸の中にあつたへき地教育への情熱を燃やし夢をふくらませた。病床に横たわりながら書いた「山の子らのために」という手記からも、その情熱や決意のかたさがひしひしと伝わってくる。<sup>23</sup>

新聞記事がひとつの契機になったという記述は、他にも見られる。善光寺開拓地の記念誌『開拓三十五年の歩み』には、川村郁と親しかった当時の黒石教会の主任司祭でケベック外国宣教会のデュメン神父が、「私の思い出」という文章を寄稿している。デュメン神父は善光寺平開拓地での布教に尽力し山奥の開拓地に教会を建築した司祭で、善光寺平のカトリック信者にとっては信仰の父といってよいであろう。神父は、その寄稿で次のように語っている。

（善光寺平開拓地へと登る雪道で転んだ後）私は良く警戒して、先生と一緒に深く狭い雪道を歩き続けました。歩きながら、つくづく考えました。今まで川村先生のこの苦労を想像もしなかったのです。又、先生には善光寺平で勤めるよりもっと良い学校もあったはずです。黒石付近の学校で勤めていたある日、新聞で山の親達の叫び声に気がつきました。「私達の子供のために、誰かの先生が手伝いに来てくれませんか!」「子供達はだんだん大きくなりますが、学校へ行かれませんか。どなたか助けてくれませんか!」その言葉はとても強く先生の心を打ちました。“困っている人を助ける”それは本当のキリスト教の精神ではないでしょうか。先生はさっそく私の所に相談に参りました。結果として、善光寺平に住んで

<sup>21</sup> 1962（昭和37）年9月15日付「朝日新聞」（青森版）の「辺地を救おう」という記事は、「県下には“辺地”といわれるところが、六十八市町村全部にまたがり約二百地区、五十戸（二万五千人）もある。ほぼ南群平賀町の人口と同じだ。これらの辺地はほとんど着のみ、着のままで入植した人の多い開拓地、それだけにいまでも想像以上のまずしい暮らしぶりという。」と県内の僻地の現状を伝えている。

<sup>22</sup> 「東奥日報」1964（昭和39）年5月1日付 なおこの記事は、同年5月10日付「炬火（たいまつ）」及び、前掲書『青森県とカトリック 宣教百年史』の黒石教会を扱った箇所に掲載されている（275-277頁）。

<sup>23</sup> 前掲書『黒石人物伝』（123頁）



いました。<sup>24</sup>

このように幾つかの資料は1955（昭和30）年の「秋」に、善光寺平の人々が教師を求めていることを伝える新聞記事の存在を語っている。そしてその記事が契機となり、川村郁は善光寺平に赴任したという書き方がなされている。

しかし、次の理由から記事の存在は疑わしい。第一に、善光寺平分校が開校したのは1955（昭和30）年の10月22日であり、同年の「秋」に掲載された記事を見てその10月に赴任したということは、時間的に非常に短く不自然だからである。第二に、川村郁の「手記」にはその新聞記事の存在は指摘されていない。「手記」では、善光寺平のことを耳にしたのは、1955年の「夏休み」に大木平小中学校校長の「村田先生」の話とされている。

母の許可を得、私は具体的な運動に、乗り出した。すでに春の定期異動発表後だったので、実現は明春だろうと考え、自分の気持ちを伝えておき、この事は、できるだけ多くのへき地校を訪ねてみよう計画した。（夏休みを利用して、自宅から近い黒石、平賀地区の開拓地を。秋の、農繁期休校を利用して青森、上磯方面へと。）夏休みに、先ず、平賀地区の一番の奥地、大木平小中学校を訪ねた。自宅からバスで二時間三〇分。十和田湖へ通じる国道の川筋「温川温泉」から右側の山どうを四〇分登りつめた所に小さな学校があった。夏休み中のことで、子どもたちの姿はみえなかったが、校長の村田先生は、快よく迎えて下さり、色々と、へき地での苦心談や経営方針などをはなしてくださった。ここでは私は、意外なニュースを耳にした。<sup>25</sup>

川村郁は、実際に自分の目で僻地の現状を視

察すべく、計画し行動している。善光寺平のことを知ったのは、大木平小中学校校長の村田先生が語った「意外なニュース」が最初である。「夏休み」の時期とされているから、この出来事は7月から8月であろう。「手記」を信用するならば、先の1955（昭和30）年「秋」の記事に関する記述は誤りと言わざるを得ない。

実際に1955（昭和30）年の「東奥日報」紙をくまなく探したが、やはり秋頃にその記事は見つからなかった。しかし、同年の6月30日に「学校まで何と三里半 全児童が未就学 平賀町善光寺平開拓地早急な分校設置陳情」という記事が掲載されていた。

南郡平賀町善光寺平開拓地のコドモたちは学校まで通うのに三里半も歩かなければならないところから、全児童が未就学という状態だった。そのためこのほど同部落から平賀町教育委員会に分校設置の陳情書が出されたが早急な対応が待たれている。同開拓地は黒石市の奥地にある温川温泉からさらに三里半も奥まったところにある文字通りの陸の孤島で、コドモたちは葛川小学校に籍を置いているものの三里半の道路では通学も困難なため、十一名の児童のうち四名は母村の旧畑岡村（現板柳町）に帰って就学、残り七名は長期欠席をして家業の製炭作業を手伝っている状態。電灯もなく、井戸水さえもない開拓地だが、それよりもコドモたちに光りを与える教育の場が欲しいという部落民の意思が今回の陳情となつたもの。なお同町教委および南地方事務所では二十四日現地の実情調査を行った。<sup>26</sup>

<sup>24</sup> 「東奥日報」1955（昭和30）年6月30日付。記事には次のようなコメントも載っている。「△山辺中南教育事務所長談＝二十四日調査に行ってきた。早急に分校を設置しなければならないが、分校設置は各町村の負担となる。善光寺平は旧畑岡村からの入植者がおとところ当初この問題について旧竹館村と話合つたのだから町村合併でまた延びたようだ。合併の余波を受けたとも考えられるが、いずれにしても早急に解決しなけ

<sup>24</sup> 善光寺平生産組合『開拓三十五年の歩み』1985年（13-14頁）（文中のカッコ内は筆者注）

<sup>25</sup> 「黒石民報」1965（昭和40）年3月12日付

善光寺平開拓地の人々が、未就学の子どものために分校の設置を平賀町教育委員会に陳情したことが、確かに伝えられている。

夏休みに「村田先生」から善光寺平の情報を初めて提供された川村郁が、一、二ヶ月前の6月30日の記事を探し当て、あるいは誰かに示されて読んだという事は十分に考えられる。母や所属教会の司祭であったデュメン神父に、その記事を見せて善光寺平について説明したということも、あるいはあったかもしれない。ただし、「手記」を信用するかぎり、この新聞記事が善光寺平へ赴任する契機になったという説は、誤りである。川村郁は、自らの足で僻地の現状を視察する過程で、「意外なニュース」として善光寺平開拓地の情報を得たのである。

## 2-2. 招きに応える

川村郁ができるだけ多くの僻地を視察するべく、最初に訪れたのが「自宅から近い黒石、平賀地区の開拓地」「平賀地区の一番の奥地」の大木平小中学校であった。おそらく、苦渋の思いで娘の僻地教育の希望を許してくれた母の心配を、少しでも和らげるために黒石近郊に赴任先の目処を得たいと思つてのことであろう。

大木平小中学校のある大木平地区は、戦後間もない1946(昭和21)年から入植が開始された開拓地である。『平賀町誌』には、地を開き生活場所を整えていく入植当初の様子と、やはり子どもたちの教育に心血を注いだ分校教師のエピソードが記されている<sup>27</sup>。大木平小中学校は、1951(昭和26)年に葛川小中学校の分校として始まり、その後1955(昭和30)年4月1日に本校として独立した<sup>28</sup>。川村郁が訪れた時、大木平

小中学校は本校となつたばかりの学校であつた。

川村郁が大木平小中学校の村田校長から聞いた「意外なニュース」とは、次のごとくである。

「この大木平地区の反対側の山口、善光寺平という開拓部落があり、入植後、四年にもなるがまだ学校もなく、子どもたちはこの学校(大木平)に通学することになっているのであるが、何せ、往復五時間もかかる為め通学は不可能に近く、子どもたちは、野つ放しの状態である。入植当時は子どもの教育など考える余裕もなく、ただ土地をきり開くことにだけ専念していたが、最近“次世代を背負う子どもたちの教育が放任されていることを真剣に考えるようになり、どんな小さな分校でもいいから、学校が欲しい”と役場、教委、教育事務所などに陳情している。現実はいつになるかわからないが、私も出来るだけ、この不幸な子どもたちの為に、力をつくしたい…」という、校長先生のお言葉。私は直感的に、「善光寺平こそ私の願つていた働き場所だ!!」と、心に決めてしまつた。<sup>29</sup>

善光寺平という開拓地で分校設置が急務である、とのニュースは川村郁の心を捉え、「直感的」に自分の赴任先と決めてしまつたという。村田先生から話しを聞いたその足で「すぐにでも善光寺平開拓地を訪ねたいと思つた」<sup>30</sup>が、時間的に無理と判断した村田校長から制止されてあきらめたという記述もある。さらに、「まだ見ぬ土地“善光寺平”のことで頭が一ぱい、夜も眠れぬ程だつた」と未知の僻地に対する期待感が描かれている。そして彼女の境遇は、急展開を迎えることになる。

ればならないので善処したい。△小野町長談＝現地の実情を聞いたが施設の必要性はいうまでもないので、今後県の補助をあおぐなどして恵まれない開拓地の子どもたちに教育が受けられるよう努力したい。」

<sup>27</sup> 前掲『平賀町誌』(1054-1056頁)

<sup>28</sup> 同上(1053頁)に大木平小中学校の沿革が記されている。1955(昭和30)年に本校として独立した際、「初代校長村田良長、校長共職員三名。児童(小学校二四名)、生徒(中学校八名)計三二名。」

とあり、川村郁が訪れて話しを聞いた校長「村田先生」の名が載っている。

<sup>29</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年3月13日付

<sup>30</sup> 同上

（夏休み中の認定講習終末試験の際、教育事務所所長補佐の棟方松江先生に声をかけられ）あんたは、僻地校を希望しているそうだが善光寺平は、あんたにとって理想の場所でしょう。この前分校設置問題で、一度視察してきたが、部落の人達は皆、教育に関心が深く、子供の事を真剣に考えている…それに感じのよい人たちばかりだ…景色はいい…あそこを希望した方がいいですよ。とのこと。私の善光寺平熱は、更に拍車がかけれらた。そして意外に早く、その年の十月二十二日、私の希望が叶えられ、赴任することができた。希望が叶えられるのは明春だろうとおもっていたのに十月二十二日とはあまりに急なこと。「善光寺平分校の開校式が二十二日で、関係方面に案内状までだしてしまつてある。先生のいない開校式など考えられないから是が非でも、この日は山に上つてほしい」とのこと。一と月ばかり前に平賀町教育委員会の、山野井指導主事が、六郷第二小を訪ね、私に意向を確かめた時はつきり「僻地校勤務の希望」を伝えておいたが、こんなに早く実現することは、考えてもいなかったのである。<sup>31</sup>

前述のように、善光寺平開拓地の人々の陳情を受け、平賀町教育委員会では分校設置を急務と考えた。しかしすぐに赴任する教員の目処はつかなかったであろう。そのような状況において、奇遇にも僻地校での勤務を希望する者が現れた。教育委員会にとって願ってもない適任者の出現であったにちがいない。善光寺平の開拓者たち、教育委員会、川村郁の願いが、すべて重なり合った瞬間であった。

この瞬間を招いた最も重要な役割は、未知の善光寺平開拓地への赴任を「直観的」に受け入れた川村郁の姿勢であろう。しかし、彼女は何故「直観的」に受け入れることができたのか。

彼女が僻地勤務の希望を抱いたのは昭和26年頃であるが<sup>32</sup>、それは受洗した年と重なる。その後の四年間は、母の反対に耐え辛抱強く待った期間である。前述のデュメン神父の回想から、川村郁は僻地で働く希望について司祭と相談していたことがうかがわれる。その四年間は、祈りを通して、信仰の面から十分な準備態勢が整えられていった時期だと考えられる。1955（昭和30）年春に母の許しを得るや、すぐに積極的な行動に移ることが出来たのは、その四年間の準備期間があったからであろう。そして村田先生から善光寺平開拓地のことを初めて聞いた時、彼女はその「意外なニュース」を「神の御旨」と直観的に理解したのではないだろうか。ペトロが「すべてを捨ててイエスに従った」<sup>33</sup>ように、彼女はその「招き」に直ぐに応えようとしたのであろう。

### 3. 開拓地の生活——エピソード

川村郁は、1955（昭和30）年10月22日、善光寺平分校の開校式の日山に登り、その後1957（昭和32）年2月に病に倒れるまで、約二年半をこの開拓地で過ごしている。「手記」には、厳しい自然条件の中で生きる開拓者たちの生活と、彼らとともに生きる川村郁自身の姿が生きて描かれている。本章ではそれらのエピソードのうち、幾つかを紹介したい。

#### 3-1. ベビーオルガン

川村郁が善光寺平に赴任するときに同時に山に運ばれたという「ベビーオルガン」は、「手記」にたびたび登場している。以下の引用は、オルガンそのものを知らない開拓地の子供たちが、初めて聞いたオルガンの音に驚いて逃げ出すという話である。野放しに育った子どもたちの現実に触れた出来事として語られている。

最初このオルガンを見た子供達は何か、得

<sup>31</sup> 「黒石民報」1965（昭和40）年3月14日付（文中のカッコ内は筆者注）

<sup>32</sup> 「黒石民報」1965（昭和40）年3月11日付

<sup>33</sup> 「ルカによる福音書」5章11節

体の知れない物に見えたのか、好奇の目をオルガンに向けて「先生、それなに?」と、しきりにきく。大きい生徒は知っていたが、小さい子供等の大半は知らなかった。「オ、ル、ガ、ン。オルガンでいうものよ。キレイな音が出る。ほどこいて貰ったら、ならして上げるよう」包装してきた木板を取りはずし、教室の中に置かれた時、子供達の興味の的は、“新しい先生”もさることながらこのオルガンに集中された。子供達に取囲まれながら、ふたを開け、「ブー。」と、ド、ミ、ソの和音を弾いてみた。「ワアツ」と、目を丸くして驚いた子供達の顔。変な顔をして逃げ出そうとした男の子がいた。今度は私の方が驚いた。オルガンの音に逃げ出す子。これが僻地の子か。と、「だーれ、逃げなくてもいいのよ。こわくないの。さあ、何の歌、知ってるかしら。みんなで、歌いましょう」と、子供達の知つていそうな曲…むすんでひらいて、ドングリコロコロ。おててつないで、夕やけ小やけ…をつぎつぎと弾いて一しよに歌おうとしたが、誰も口を開くものがなく、ただ、不思議そうな目つきをして、私の手もとを見つめているばかりだった。「この子等との生活が、今日から始まるのだ。いやもう始まったのだ。」と、オルガンを弾きながら、一人々々の顔を見つめた。<sup>34</sup>

分校では学芸会やクリスマス会等の催しの際、午前中に子どもたちの出し物を行い、午後には大人たちが演芸等出し物を楽しんだというが、そのような催し毎にこのペビーオルガンが大いに活躍したことが「手記」には描かれている。オルガンは「楽しいにつけ、さびしいにつけ、子ども達や私や村の人達を慰めてくれた」<sup>35</sup>重要な存在であった。ラジオの音楽さえ聞くことのない開拓地の人々にとって、バラック校舎から流れる美しいオルガンの音色は、深く心に

沁み入ったことであろう。

### 3-2. 手袋を編む

川村郁を苦しめた問題のひとつに、開拓地の子どもたちに対する物質的な支援があった<sup>36</sup>。以下の記述は、自身も決して裕福ではなかった川村郁が、冬季に薄着で寒さに震える子どもたちに、自分のセーターを編むための毛糸を手袋を編むエピソードである。

この貧弱な学校にでも、子どもたちは無上の喜びを感じて嬉々として、雨の日も雪の日も元気で通ってくる。…中略… 低学年の子どもたちだけでも手の廻り兼ねる忙しさで、午前中は高学年は殆んど自習、午後低学年を帰宅させたあと高学年の指導。…中略… その忙がしさと神経の消耗率は、町のすし詰め学級の経営より、ひどいと思つた。でも、これが自分の希望してきた“仕事”なのだから、学習指導面での苦労は何とも感じなかった。ただ、貧しい子どもたちの為に、思う存分の力になつてやれない自身の貧しさが、うらめしかつた。セーターを二枚よりないので、寒さの酷しい夜では足りないだろうと、毛糸を持つて上がった。しかし、十六人の子どものうち手袋を持つているものはたつた四人。あとの十

<sup>36</sup> 善光寺平開拓地の人々の当初の困窮は、里との交通の不便さが大きい要因であった。開拓当時の貧窮度について、前掲『開拓三十五年の歩み』に、開拓者の中心的存在であった葛西万太郎の回想として、次のように記されている。「入植以来、生活と営農の資金源は、僅かの開拓補助金と国の融資が頼りであったが、それは生活費のほんの一部にしかならなかった。幸い親元があるので、その仕送りで細々生活を続けた。金目になるものがないわけではなかった。木材も曲り竹も金になるのだが、何しろ道路がないので運搬できず、開墾のじゃまになるので無惨にも焼いてしまわなければならなかった。当時は出稼ぎもない時代だったので、春から秋までは開墾、冬期間は、炭焼きが主体であった。生産した木炭は4kmもある山道を背中に背負って運んだ。開墾をするにも重さが4kgもある鍬で竹の根や木の根を掘るのだからこれまた大変である。手から水疱が消えることがなかった。」(9-10頁)

<sup>34</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年3月21日付

<sup>35</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年3月23日付

二人は手袋もはかず冷えきった手をポケットや袖につつこんで通学しているといった惨めな状態である。この子等に手袋もはかせず、自分だけ温々とセーターを作ることができようか。手袋のない子等を見出してから、すぐ手袋作りにとりかかった。二本指のミトンを暗いランプの灯の下で、せつせつと編んだ。一日も早く、はかせてやりたい一心で、ランプの油が切れるのでも知らず編棒を動かした夜もあつたが、全員、小花をししゅうしたり、頭文字のついた手袋をはいて元気に登校してくるのを見た時、セーターを一枚多く着たよりも暖かい感じだつた。<sup>37</sup>

一般に現代では、必要に応じて支援者の役割は多様化しており、カウンセリング、教育サービス、物資援助などを担う主体はそれぞれ独自の専門的分野において働いている。しかし人材に限られる僻地では、一人が多様な役割を担う。川村郁の場合も、ある時は教育者として、ある時はカウンセラーとして、ある時は開拓地の一労働者として、多様な要請に応じた。目の前に手袋を持たず震えている子がいれば、手持ちの毛糸を惜しみなく提供した。これは誰もがでることでない。各々の問題に対して、彼女は愚直に向き合った人である。

### 3-3. 無医村

僻地の開拓地で最も重大な問題は、病人の治療であった<sup>38</sup>。「手記」には、ある母親が発狂の末に亡くなった出来事が克明に語られている。

今泉肇二君のお母さんが死んだ。発狂して死んだ。一夫と三人の子を残して死んだ。発狂した重病人を三日も放っておかねばならない無医村の開拓地での悲しい思い出。…中略…正月の或る日、このお母さんは、部落の人達十数人と一しよに、三里はなれた葛川部落に、買出しに行つたのです。丁度日曜日だつたので、私も一しよに山を下り、温川温泉で入浴し、帰りは又、この人達と共に山を登ることにして、相川旅館で時を過ごしていました。午前中はすばらしい天気だつたのに、昼過ぎ頃から天候がくずれ、吹雪になつてきたので、私達は心配しながら待つていました。五時近くなり薄暗くなつても、買出の人達がこないで、二年の阿部茂行君や、そのお母さん達数名と、先に山へ登ることにし、大分難儀をして学校に辿りつきました。…中略…無事に帰つたとのことでしたので、安心して眠つたのでした。それから数日後に肇二君のお母さんが発病したのです。買出しに行つた時、運悪く、このお母さんは、生理日でした。普段から体の弱い人が、往復六里の道を吹雪に遭い重い荷物を背負つて無理したのにもつてきて、木炭代を受取りに、下へおりたまま帰つてこない夫の身を案じて、夜も眠らなかつたのです。疲労と心配が重なつてしまつたのでしょう。とうとう発狂してしまいました。見るにしのびない悲惨な姿でした。…中略…吹雪が止むのを待つて、温川温泉に泊まつた夫が、部落の若者の必死の急報によりかけつけた時は、夫の顔も、子供の顔もわからぬ狂人になつていました。お医者さんは、一人もいない、電話もないし勿論電報も打てない。三里はなれた葛川診療所まで患者を連れて行くにも、医師を迎えに行くにも、吹雪がひどくて不可能な話です。組合長さん、PTA会長さん、婦人会の人等私達は、ただ、オロオロと、病人の枕元で、吹雪の止むのを待つばかり。夏分でしたら、保健婦さんが時々部落を訪ねて下さいますけれど、冬はめつたに来て下さら

<sup>37</sup> 「黒石民報」1965（昭和40）年3月26日、27日付

<sup>38</sup> 『開拓三十五年の歩み』で葛西万太郎氏は次のように回想している。「当地での一番の悩みは、冬期間に病人が出たときである。部落の人が全員で、手轎に乗せて急勾配の山道を下るのだが、里の患者であれば当然助かるのに、助からなかったこともあった。また里からの連絡が届かず、実家の親が死亡したのに、一週間も経ってから電報が着いたこともある。36年の3月には、58歳の男性が帰宅途中、吹雪のために凍死して5日振りに発見される悲しい出来ごともあった。」（10頁）

ないしこの部落の開拓者の一人元衛生兵だったという葛西万太郎さんがただ一人頼みの綱でした。急患の場合は、とにかく“万太郎さん”の所へ駆けつける。手当もして貰うし、注射も打つて貰う。風邪引きや腹痛みの病人ならまだしも、発狂してしまった病人では、頼みの綱の“葛西万太郎”さんも手の施しようがありませんでした。発狂してから三日目。漸く吹雪が止まりました。一刻も早く病院に運ばなければいけませんので、部落総動員で下へおろすことにしました。その上に戸板をのせ、ふとんを敷き、病人を寝かせ、丹前やもうふ等でしつかり体をおおい、暴れないように手拭いで手をしばり体もそりにぐるぐるとしばりつけてしまいました。…中略…何日もふきつのつた丈余の雪の中を、組合長さんはじめ、部落の男性総動員による病人の運搬は、全く頭の下がる様な涙ぐましい程の隣人愛の、あらわれでした。私は一番後の方を、馴れぬカンジキをはき、貢君の手を引き、歩きながらこの情景を見て、ずいぶん色々な事を考えさせられ、記録に残しておきたいなあと思つたものでした。…中略…しかし、既に手おくれで実家の人達や長男、次男の顔もわからぬまま、世を去ってしまったのでした。何という悲しい哀れなことでしょう。無医村なるが故に、最愛の夫や子ども達を残して先立たねばならなかつた肇二君のお母さん。…中略…一偶然といいましょうか、このお母さんが亡くなって丁度一年目に、今度は私自身が病気になる、肇二君のお母さんと同じ様に、部落の人達の愛のリレーで、病院に運ばれたのでした。<sup>39</sup>

国道102号線から善光寺平に上がる道路は、現在でも冬季間は雪のため閉鎖される。筆者が今井氏に案内されてその道を車で登ったとき、

道路脇のガードレールがことごとくねじ曲がっていることに驚愕した。雪の重みで押し曲げられたのだという。当時、その道を橇で病人を運ぶ難儀は、想像を絶する。川村郁自身も病に倒れた際、部落の人達の手で病院まで運ばれた。無医村の悲惨さを彼女は身を以て体験したのである。彼女は「どんなにへき地でも、絶対に“無医村”であつてはいけない」<sup>40</sup>と強い表現で訴えている。

ところで、古い新聞を調査中、二つの興味深い記事が見つかった。ひとつは1960(昭和35)年3月5日付「朝日新聞」(青森版)の「“愛のソリ”五時間 平賀町善光寺平 重病の今泉さん助かる」<sup>41</sup>という記事である。それによると上記の亡くなった母親の夫が喘息をこじらせ重体となり、開拓者たちが麓の病院まで運んだという記事である。奇遇にも妻と同じ方法で病院に運ばれた夫は、命をとりとめた。山の上から橇、里に下りて馬橇と乗用車に乗り継ぐという方法で病院に運ばれたと記されている。僻地ではこのような住民による相互扶助の精神が機能している。雪深い2月に病に倒れた川村郁も、おそ

<sup>40</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年4月22日付

<sup>41</sup> 「朝日新聞」(青森版)1960(昭和35)年3月5日付「部落民のソリで重病の一開拓者が命をとりとめた。平賀町善光寺部落の今泉亀太郎さん(五二)は一カ月ほど前から悪性のゼン息で苦しんでいたが先月二十五日からせき込みが激しく重体となった。今泉さんは四年前に奥さんが死んで中学三年の肇君(一六)と幼い男の子二人の四人暮らし。肇君たちは二日間寝ないで看病したが思わしくない。これを聞いた奈良金太郎さん、葛西万太郎さんら開拓民十五人が「町の病院へ入れよう」と木を運ぶソリに今泉さんを乗せて二十七日午前四時部落を出発した。標高七百五十メートルの高地なので積雪は三メートル。幸いに前日雨が降って固雪になっていたのでソリはよくすべった。それでも六キロの兵平地区まで五時間かかった。平六から黒石市の一ノ渡地区までの八キロは馬ソリを雇い、葛西さんと中村重蔵さんが付添った。中村さんが役場と葛川支所間の町内電話で連絡したので、平賀病院の乗用車が一ノ渡までむかえにきていた。こうして今泉さんは四十キロの道のりをソリ、馬ソリ、乗用車と部落民の愛のリレーで入院でき、快方に向かっている。」

<sup>39</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年4月18日、20日、21、22日付

らく同じ順序で、開拓者たちの手で病院まで運ばれたのであろう。

もうひとつの記事は、元衛生兵として無医村の人々に治療行為をしていた人が警察から取り調べを受けているという記事<sup>42</sup>である。取り調べ中の人物は、「北郡板柳町飯田、葛西以佐美」とある。板柳町とは、善光寺平に入植した人々の母村の畑岡村にあたる<sup>43</sup>。また、元衛生兵とされる人の名が善光寺平の元衛生兵葛西万太郎さんと同じ姓である。二人が親族関係にあったかは知る由もないが、無医村に生きる人々にとっ

て、この二人の元衛生兵の存在がどれほど心強かったかは容易に想像できる。記事によると、取り調べを受けている「葛西以佐美」は、「法にふれることは知っていたが、この部落の状況では、困っている人を実際にみたらいやとはいえなかった」と語っており、部落民も減刑を嘆願している。この記事もまた、無医村の厳しい現実とそこに生きる人々の相互扶助の精神を物語っている。

#### 4. 「手記」

「手記」は、彼女が弘前大学病院入院中に、善光寺平での約二年半の出来事を書き記したもののだが、主治医から執筆を止められ未完のまま終わっている。本章では、この「手記」が書かれた期間を特定した上で、執筆当時の川村郁の内的状況について考察したい。

##### 4-1. 執筆の時期

「手記」はいつ頃、執筆されたのだろうか。「手記」の全文は、川村郁が亡くなってから約二年半後の1965（昭和40）年3月9日から5月2日にかけて、「黒石民報」紙<sup>44</sup>に「山の子らのために、へき地教育に情熱をささげ途中でたおれた一女教師の手記」というタイトルで、四十四回にわたって連載された<sup>45</sup>。「黒石民報」では「遺

<sup>42</sup> 1962（昭和37）年10月9日付の「朝日新聞」（青森版）の記事である。「無医村には「仁術」だったが板柳署取調べの男 無免許で診療十年 地元民らは減刑嘆願」というタイトルで次のように書かれている。「板柳署は北郡板柳町飯田、葛西以佐美（四三）を医師法違反の疑いで任意で調べているが、葛西はさる二十八年から足かけ十年、無医村の同部落で診療に当り部落の人たちは『葛西さんは注射や薬の実費しかとらなかった。それも百円とかかったことはない』といっており、警察へ減刑嘆願書を出すという。調べによると、葛西は戦争中台湾で衛生曹長をし、二十一年引揚げ、二十二年から二年間、町村合併前の畑岡村役場で衛生係を勤めたが、役場をやめてから農業のかたわら経験を生かして部落の人たちの健康相談や診療に当るようになった。飯田部落は農家約百五十戸、葛西の世話にならない家は一軒もないという。葛西は頭痛、カゼはもとより胃かいよう、神経痛まで診療に当り、板柳署で家宅捜査したところ、聴診器や血圧計をはじめ薬約二十種と注射液などがでている。調べに対し、葛西は『法にふれることは知っていたが、この部落の状況では、困っている人を実際にみたらいやとはいえなかった。私でわからないときは、どこの病院に行ったらいいかを教えた』といっている。近所の和田いねさんは『五年ほど前、まだ赤んぼだった孫が急に熱を出し、いまにも死にそうになり、部落にはタクシーもないので、葛西さんのところにかけて込み、注射をしてもらって助かりました』と語り、また佐藤義明さんは『母は心臓が弱いので、乗物で病院に行くわけにはいきません。葛西さんには頼んで無理にやってもらっていました』といっている。」

<sup>43</sup> 昭和27年5月に開始された善光寺平開拓地の入植は、旧畑岡村が二三男対策として行ったものである。従って善光寺平の開拓者たちの母村は旧畑岡村であるが、昭和34年の町村合併により、板柳町に四部落、藤崎町に一部落が分かれて合併したという。『開拓三十五年の歩み』（8頁）参照。

<sup>44</sup> 昭男氏からお借りした「黒石民報」1965（昭和42）年7月26日付の紙面によると、「日刊但月曜日休刊」とあり、発行者は黒石民報社社長中村文三とある。「黒石民報」紙は既に廃刊された。

<sup>45</sup> 「黒石民報」連載の二年後1967（昭和42）年7月26日、同紙の「みんぼう喫茶室」というコラム欄に川村郁の手記の出版計画について記されている。「…ふと、故川村いく遺稿集の出版を怠っているわたしに気がついた。△—これはわたしの心の負債となつていたのだからおとしの師走ごろからかんぞうを侵され、そのせいで黄たんでくるしみ出し、むしばまれるような苦患に耐えるのが勢いつばいで全てにしゅん巡につきまといつつその責を果たさないままに病床につき切った。△—わたしは、とくさんと全く面識がないが、彼女の手記である「山の子らのために」という原稿を整理したとき異常の感動に襲われた。△—へき地、善光寺平で神徒そのものの聖浄な奉仕をかたむけつくし、ついには教職に殉じたとくさんの手記は

稿」となった「手記」を遺族の許しを得て連載したという<sup>46</sup>。確かに「手記」は結果的に「遺稿」となったが、川村郁が存命中、既にその概要は新聞で紹介され、本人のコメントも寄せられている。それは、1960（昭和35）年12月27日付「朝日新聞」（青森版）「忘れられない山の記録、開拓地の分校、元女教師の記録」という記事である。

川村さんはできれば“一生を開拓地で送りたい”という決意に燃えていただけにベッドに寝ていても山の子らが忘れられず、このほど四百字詰め原稿用紙九十五枚に“山の生活記録”をつづった。糖尿病などのほか目も不自由という難病のため、この記録をつづけて書くことを主治医から止められたため、まだ未完成だが、無医村のため夫や愛児を残して死んだ貧しい開拓者の妻、寒中にハダの見え

る服をきていた子、など辺地にクワを打ちこむ開拓者の苦闘が一ぱい書かれている。身をもって辺地教育に当たった若い女教師の生活記録のあらましを紹介しよう。<sup>47</sup> …中略…川村先生は一昨年から続けたコバルト治療も効果がなく、来年一月中旬ごろ、神戸市の県立医大に移る予定だが、最近どうやら読み書きできるようになり、神戸ではベッド・スクールの先生になるという。あれから五年たったが、山の人たちは川村先生を忘れずに黒石市の実家や病院に顔を見せては元気づけて帰るという。川村先生は「私にとって善光寺平の生活は捨てがたいものだった。不自由な目をおして思い出をつづった。もう一度山で生活したい気持ちで一杯です」と語っている。<sup>48</sup>

この記事により、この「手記」は、僻地の現状を広く人々に伝えるべく、生前の川村郁自身から新聞社に提供されたことが推測できる。また、その執筆時期はこの記事の日付以前ということも知られる。執筆時期を特定するヒントは、「手記」の次の記述にも見られる。

へき地教育への夢もはかなく消え去り、この弘前大学付属病院のベッドの上に、内科的疾患と、半盲目の身を横たえての生活に明け暮れてから、もう一年半になろうとしている。最低五年。出来得れば、生涯ここで働こうと、心を決して赴任した善光寺平での勤務も、三年足らずで終らねばならなくなり、開拓地のために楚石となることさえ出来ずにしまったことは、何よりも残念である。最初、病気になって黒石病院に入院したころは、ただ、山に残してきた子どもたちのことばかり考えて、イライラしかえつて病状を悪化させてしまった。ここの病院に入院してからは、主治医に、「あなたの病気は、神経を使うことは、

純粋な文章で遺されたへき地教育を向上させる道標であると、わたしははげしい動器を禁じ得なかった。△－わたしは、とくさんの手記を、とくさんの遺稿集を出版する仕事の尊さがしみじみわかり、病窓から開放される目を待ちかねてとくさんの遺稿集刊行の準備をした。△－じつは、「山の子らのために」が黒石民報に連載され四十四回でいおう手記が終わったおとしの秋わたしはそれを単行本にするために、当時平賀町長であった小野清勝さんがかつて中南教育事務所長だった因縁をたより題字と序文をお願いしたり須藤徹博画伯に装ていを依頼しながら公刊を果さずにいたのである。△－わたしは出版計画を一新して事をはこび、どうやら九月上旬には出版できる見通しをつけた。…後略…」（「郁」を「とく」と読む誤りもあるがそのまま引用）コラムの書き手は「正夫」とある。川村郁の手記を出版する計画は昭和42年の段階で生きていたが、結局実現には至らなかった。

<sup>46</sup> 1965（昭和40）年3月9日付の「黒石民報」紙は、連載を始めるにあたり次のように説明している。「川村さんは、できれば一生を開拓地で送りたいという決意に燃えていただけに、ベッドに寝ていても山の子らが忘れられず糖尿病と視力を失った病軀に鞭打って『山の生活記録』をつづった。この記録は主治医から再三にわたり止められるよう注意をうけながら綴ったもの。しかし未完成のままに惜しまれてこの世を去った。…中略…本社では遺族の許しを得て明日からこれを連載することにする。」

<sup>47</sup> 「朝日新聞」（青森版）1960（昭和35）年12月27日付

<sup>48</sup> 同上



絶対だめ、あなたの病気にマイナスになるだけだ。」と、固くいわれ、なるべく山のことも、子どもたちのことも考えないように努力した。九月十六日付で退職になってしまい、あきらめもついたら、何かしら、静かな落着きさえ出てきたような気持ちになった。いつまで入院していればよいものか、私には見当がつかない。目が少し不自由だけれど何ら苦痛も感じない。静かなこの入院生活中に、私の開拓地での生活を、静かに回想し、その思い出を綴ってみようと思いペンを取ってみた。<sup>49</sup>

「手記」執筆に至る経緯が簡略に記されたこの箇所には、「九月十六日付で退職になってしまい…」という記載が見られる。この表現は、「手記」を書き始めた日が退職以降でその年内であることを示している。退職は1959（昭和34）年9月16日である<sup>50</sup>。したがって、「手記」は退職後の1959（昭和34）年9月下旬以降の年内に書き始められ、遅くとも「朝日新聞」で紹介される翌年の1960（昭和35）年12月末までに書き終わられたとすることができる。「手記」を記した時

期は、さしあたりここまで特定できる。

#### 4-2. 執筆までの心の変化

川村郁の「手記」は、僻地の子供たちの窮状や無医村の悲惨さを訴えるという社会性を備える一方、住民一丸となって楽しむクリスマスや学芸会の様子、月明かりで本を読んだ体験などが楽天的な描写で綴られている。しかし、「手記」を執筆するまでの彼女の内面は、その楽天性とは裏腹な状況にあったのではないかと思われる。実際、入院生活を初めてから「手記」執筆に取りかかるまでに、実に二年半以上の月日が流れている。

無論、充実した分校での教師生活を振り返るには、肉体的にも精神的にも時間を要したであろう。川村郁は、病に倒れて山を下りてから、すぐにその現実を受け入れることはできなかったのではないだろうか。川村郁は、善光寺平開拓地での生活に強い愛着を持っていた。その生活は、古い価値観に縛られず自らが自由に選びとった生き方であった。貧しく純真な子どもたちと開拓者たちとの触れあいに、彼女は幸福を感じていた。

母の許可を得て、赴任先が決まり、分校開校に合わせて善光寺平への山道を初めて登るときの記述は、僻地教育への熱意と気概が鮮明に描かれている。

昭和三十年十月二十二日この日は、わたくしにとつて、一生涯忘れることのできない、感激の日である。朝から冷たい秋雨が降っていたが、わたくしには雨のことなど意中になかった。…中略…デコボコ道をバスに揺られて二時間半。温川温泉で下車し、五六人の出迎えの人に案内されて、道の左側へ入った。長い丸太橋を二回も渡り、細く険しい山道を登った。雨が降っているの、道が非常に悪く、年老いた母は、大変だつたらしい。わたくしは平気だつた。“このけわしい道が、これからのわたくしの進んで行く道なのだ。これを克服していくのがわたくしの義務なのだ”と一

<sup>49</sup> 「黒石民報」1965（昭和40）年3月10付

<sup>50</sup> 『平賀町誌』には「大木平分校（善光寺平分校共）沿革」が紹介されており、昭和30年10月1日開校の善光寺平分校の初代主任として川村郁の名が記されている。しかし退職した年については記載がない。『黒石人物伝』には「1957（昭和32）年2月から糖尿病と眼病をわずらい、後髪引かれる思いで学校を休み、弘前大学や神戸医科大学病院へと入院をくり返した。しかし病気はなかなかよくなり、1959（昭和34）年9月には退職せざるをえなかった。」（131頁）とある。これによれば退職は1959（昭和34）年9月である。この年が退職年であることは、善光寺平分校の貧弱な施設や少ない予算について伝える「朝日新聞」1959（昭和34）年11月19日付の記事からも明らかである。「分校開校当時、黒石市の上十川小から進んで赴任、りっぱな教育効果をあげながら病気のため、去る九月十六日退職した川村郁先生が『山の子供は一つの物を教えるの一つだけ覚える。町の子のように一つ数えると十も覚えるということはないが、みんな純真です。この子たちと勉強できる私は幸福だ』—といった言葉が思い出される。恵まれぬ辺地の学校の施設や設備をよくするのが政治家のつとめではなからうか。」

歩一歩、踏みしめながら、この山道を登った。…中略…あの、けわしい山道の上に、この様な広い、未開の原野があつたのか、と目を疑う程の広野である。十年後、二十年後に、この未開の原野が青々とした畑や、牧草地になるのだ。これをきり開いて行く、開拓者たちと、苦楽をわかち合い、これからの長い年月を、生きて行くべく希望して来た自分の姿を見つめなおし、何か知らぬが緊張の為、身ぶるえがした。「負けては駄目よ」と自身にいきかせ、雨も漸く晴れ上がった善光寺平への第一歩を踏みしめた。<sup>51</sup>

このように外部の反対をねばり強く説得し、一生を賭けるほどの思いで選択した道が、志半ばで、外的圧力ではなく、自分自身の病によって閉ざされたことによる失意と無力感は、想像するに余りある。善光寺平開拓地の人々とのつながりは分校の教師としての関わりであり、この関わりを絶つ「退職」の決定は、療養中の彼女を大きな挫折感に陥れたことであろう。

「手記」では、この頃の失意や挫折感に関して、「最初、病気になって黒石病院に入院したころは、ただ、山に残してきた子どもたちのことばかり考え山に帰りたいと、夜も昼も考えてイライラしかえって病状を悪化させてしまった」と短く述べられている。筆者は、この「イライラ」という表現には、特別の意味が込められていると想像する。

川村郁が山を下りた1957(昭和32)年前後の時期は、善光寺平開拓地にいくつかの新しい動向が見られた。病に倒れた同年2月から程なく、分校の新校舎が落成している。また、既に前年4月新任の教員が赴任し、川村郁は同僚を得ていた。小学校一年生から四年生を川村郁が、小学校五年生から中学校三年生までを新任教員が担当した<sup>52</sup>。川村郁の影響で善光寺平に訪れた

ケベック外国宣教会のデュメン神父の尽力により、同年6月には教会の建設工事が着工され、一年後の1958(昭和33)年6月9日に教会が落成している。少しずつ教育環境の改善の兆しが見え、開拓地の生活基盤の整備も着実に進みはじめた時期である。

このような実りの時を、手塩に育てた子どもたちとともに享受することなく、川村郁は病に倒れ、開拓地から離れていく。強い気概を以て飛び込んだ善光寺平開拓地に対する彼女の愛着には、おそらく、「私が育てた子どもたち」という意識や「人々は私を必要としている」という自負も内包していたのではないだろうか。ところが、現実には自分が山を下りても、教育環境は改善し、新しい教員が赴任し、信仰の拠点である教会も建てられた。「イライラ」とは、彼女の自意識が大きく揺さぶられたことの表現であるように思われる。

「イライラ」という表現は、「蟻の町のマリア」北原怜子の身の上に起こった次のような出来事を想起させる。既にメディアの報道により、蟻の町のマリアとして知られていた北原怜子が、体調不良のため転地療養していた箱根から意気揚々と東京の蟻の町に戻ったとき、既に別の女

---

桐氏は廃校となる1975(昭和50)年まで17年間、この分校に勤めた。善光寺平分校の廃校を伝える記事には、「十七年間も同分校の教育一筋に情熱を傾けていた同分校主任の小田桐俊彦教諭は、『赴任当時の学校はアバラ屋同然。学校へ弁当を持ってくる子供もほとんどなかった。昭和三十二年に、現在の校舎が建てられた時は、開拓民一人一人がふもとから一本一本材木をかついで来たものです。学校がなくなるのは寂しいことですが、これも時代の波でやむを得ません』と感慨深げに語っていた。」(『読売新聞』昭和48年3月23日付)と記されている。また善光寺平開拓三十五周年記念誌『開拓三十五年の歩み』(善光寺平生産組合 昭和62年)で、小田桐氏は分校の思い出を次のように語っている。「一教室で、二人同時に授業することを聞かされてびっくりした。故川村先生は小1年～小4年まで、私は小5年～中3年までの担任となり、一教室を半分(子どもたちが背中合わせにして)先生と先生だけ顔を合わせて授業するという状態であった。」(16-17頁)

<sup>51</sup> 「黒石民報」1965(昭和40)年3月14日付

<sup>52</sup> 1956(昭和31)年4月3日に、善光寺平分校に小田桐俊彦氏が新採用として赴任している。小田

性が彼女の仕事をこなしていた現場を見て、ショックを受けるのである。

アリの町には、もうりっぱに彼女の代わりの人が来ていた。いや、それは、代わりではなく、アリの町に永住する決心の人だ。怜子は、そういう場合を夢にも考えたことはなかった。アリの町のために尽くしている人間は、あとにもさきにも自分一人だと、うぬぼれていた。《アリの町のマリア》は、自分一人だと信じていた。だが、箱根から帰ってくると、もう彼女は《アリの町のマリア》ではなくなっていた。いや、少なくとも、自分一人のものではなくなっていた。

——マリア様、怜子は、アリの町のために、親も捨て、姉妹も捨て、生命も捨てる決心で帰ってまいりましたのに、そのごほうびがこれでしょうか。

逃げるようにして、アリの町から帰ってきた怜子は、わが家の祭壇の前にくずれおれて泣いた。このくやしき、この恥ずかしき。それは、両親にも、姉妹にも言えなかった。<sup>53</sup>

先に引用したように、川村郁は「手記」執筆にあたり、「九月十六日付で退職になつてしま

い、あきらめもついたら、何かしら、静かな落着きさえ出てきたような気持ちになつた。…中略…静かなこの入院中に、私の開拓地での生活を、静かに回想し、その思い出を綴ってみようと思いペンを取つてみた。」と記している。この箇所には、「静か」が三度繰り返し述べられている。川村郁は「イライラ」を経て「静か」に至り、「手記」を執筆した。

「イライラ」が自己への執着の産物であるとするれば、「静か」に「手記」を執筆する行為は、自己に拘泥した苦悩の状態から解き放たれたことを意味すると思われる。下山から二年半を経て、ようやく善光寺平での数年間の体験を客観的に回想し、それを「手記」を通して他者へと伝えようとしたことは、自己を見失った挫折の底から、再び他者とのつながりへと眼差しを転換し、自己を取り戻した彼女の「内面的変化」を示していると解釈することができる。

## 5. 僻地教育を望んだ動機

これまで見てきたところから十分知られるように、川村郁の僻地教育への思いはまことに強固であった。実のところ、彼女をそこまで突き動かした動機は何であろうか。ここでは彼女が僻地教育を望んだ動機として考えられる三つの点について検討したい。

### 5-1. カトリック信仰

既に第1章で述べたように、川村郁は兄悌司の感化を受けてカトリックへと導かれ、兄の死を経て1951（昭和26）年に受洗している。「手記」によれば僻地赴任の希望について「母に相談をもちかけたのは、昭和二十六年ごろ」とあるから、川村郁が僻地教育を望んだ動機にカトリック信仰が関わっていることは明らかであろう。彼女の信仰の厚さは、結果的に開拓地の人々をも感化し、善光寺平に建てられた教会では20人以上が洗礼を受けた。

ところが、「手記」において川村郁が、カトリック信仰に関することを一言も述べていないこと

<sup>53</sup> 松居桃樓『アリの町のマリア北原怜子』春秋社1998年（新刊）（146-147頁）。北原怜子自身の言葉では次のような記述がある。「正直を申して、私が箱根から下りてきた理由の中で、佐野慶子さんに蟻の会を奪われたくないという気持ちがありました。それどころか「蟻の街」の子供たちの指導は、私以外に誰にもできまいといううぬぼれさえあったのです。しかし、ほんとうにバタヤの街に飛び込むという意味では、私よりも私の代わりに来られた佐野慶子さんのほうに、もっとずっと真剣な激しいものがあったことに気がついた時、私は今迄の自分の気持ちがほんとうに恥ずかしくなりました。」北原怜子『蟻の街の子供たち』聖母の騎士社（270頁）奇しくも同世代（北原怜子は1929～1958年、川村郁は1927～1962年）の二人の女性は、後にカナダから同ジルイ・クパール賞を贈られる。ケベック外国宣教会のジョリコール神父が川村郁を「第二の蟻の街のマリア」と呼んだように、二人には共通点が散見されよう。

は注目に値する。おそらく、予備知識を持たずに「手記」だけを読む者は、最後まで彼女がカトリックの信徒であるということを知らずに終わるであろう。何故、彼女は「手記」において信仰について語らなかったのでしょうか。

この問題を理解するにあたっては、川村郁が僻地において自らの役割をどのように自覚し、実践していたかに思いを寄せる必要がある。川村郁が僻地教育に関心を向けたのは、そこに恵まれない子どもたちがいたからであり、教師という職業人としてその状況を黙認できなかったからであろう。彼女にとって、僻地への赴任は、開拓者たちと同じ生活環境に自らの身を置いて、教育から見放されていた子どもたちを教えることを意味した。それは確かに、弱者扶助を旨とするキリスト教の隣人愛の精神と重なるものであり、僻地赴任を希望した動機に、そのようなキリストの教えは確実に作用していたはずである。しかしここで、動機としてのカトリック信仰と教育者としての実際の働きとの、次元の異なりは明確にすべきであろう。例えば医者とは、病を患った患者の治療をすることが主たる仕事であり、その医者が何故医者となって人々を治療しているかという動機については、さしあたり治療行為そのものとは無関係と言わなければならない。とりわけ緊急を要する患者にとって、重要なことはただひとつ「治療」である。川村郁は、教育環境の整っていないバラック建ての仮校舎で、職業人として、今そこで必要とされている諸問題に最大限の力を注いだのであって、カトリック信仰がその行動を支えていることについては、副次的に開拓地の人々に察せられ、結果として伝播していったのではないだろうか。

川村郁の信仰と僻地教育の実践とに関する筆者の質問に、善光寺平分校で働いた経験を持つ従弟の今井則三氏は手紙で次のような返事を下さった。

川村先生と善光寺平の人々とカトリック信

仰の関係ですが、村の人々は川村先生の実践される姿とご人格から感化を受けて、信仰をもつようになったと思います。その後、信者になりたい方が増えたので、黒石教会にお願いして、分教会を建てることになり、その資金を、仙台司教座、県内各教会からの募金をあて、その大半はケベック会が受けもったということです。…中略…ただ、川村先生が善光寺平に行かれた訳は、あくまでも僻地の子どもたちの教育に一生尽くそうというお考え・信念があったからで、信仰がそのうらづけにあったにしろ、布教のために行ったのではないと思います。布教は、最終的には、神父様方が多くの人々の協力を得ながら続けられたと思います。<sup>54</sup>

今井氏の回想と指摘は、「手記」にカトリック信仰に関する事柄が一言も述べられていない理由を物語っていると思われる。川村郁が僻地教育に邁進した動機には、確かにカトリック信仰があったが、彼女が行ったことは布教ではなく教育であった。彼女が「手記」で伝えようと試みたのは、子どもたちや開拓者たちと共にした日常の表情であり、彼女の内的動機の表明ではなかったのである。最終的に彼女の生き方が信仰を証示し、人々を感化したが、それは彼女にとってさえ、予期せぬ意外な結果だったのではないだろうか。

「信徒の時代」と言われて久しい現代のカトリック教会が信徒による宣教の実効性を考える上で、川村郁の事例は先駆的で、多くの示唆が含まれていると思われる。

## 5-2. 津軽の教師として

川村郁は、何よりも教師であった。青森県の津軽地方の一教師として、日々具体的な教育上の諸問題に向き合っていた。そのような中で彼女が「僻地教育」を望んだ動機には、その時代、

<sup>54</sup> 筆者が2007年6月5日付で今井則三氏から受け取った手紙による。

その地域の事情が少なからず関わっていたはずである。

川村郁が教職に就いたのは、弘前高等女学校を卒業した1944（昭和19）年であり、その後、教員を退職したのは1959（昭和34）年である。実際には、1957（昭和32）年2月に善光寺平分校勤務中に病に倒れてから教壇には立っていないので、その教師生活は昭和20年代にまたがる約13年間ということになる。

終戦直後の昭和20年代は、日本の僻地教育の動向において、いわば黎明期といえる。1949（昭和24）年に、文部省は初めて全国の僻地学校の実態調査を行っており、その結果、1951（昭和26）年に「小さな学校の経営の手引き」を発行し、僻地校での教育に関する助言を行っている。翌年の1952（昭和27）年には、北海道において、全国単級複式研究大会が初めて開催された。続いて、法整備にも着手された。1954（昭和29）年には、「へき地教育振興法」が施行されている<sup>55</sup>。昭和20年代は、全国的に僻地教育振興の気運が高まり、教育行政上の施策や法整備が始まった時代と言えるであろう。

当時の青森県は、北海道や岩手県と並び、僻地学校の集積地であった。1953（昭和28）年には「青森県へき地教育振興促進期成会」が発足し、上記のへき地教育振興法の制定を、国会や関係省庁に陳情している<sup>56</sup>。全国的な僻地教育への関心の高まりを受けて、僻地に関する調査活動も行われるようになり、1953（昭和28）年の調査では、県内の僻地学校数は304校とされている。この数は、実に、県下全学校数の24.7%、小学校としては29.7%にあたる<sup>57</sup>。

さらに昭和20年代における青森県の教育界

に見られる顕著な状況として、長期欠席率の高さがある。1952（昭和27）年から、青森県における長欠率は、7年連続で全国一となっている<sup>58</sup>。たとえば、1953（昭和28）年、県下の中学校生徒の長欠率は8.35%であり、全国平均3.17%と比較しても、その割合が非常に高いことが知られる。しかも、長欠の理由として経済的事情や農林漁業の労働力不足が関わっている点は、注目に値するであろう。「家庭の無理解、貧困」を長欠の理由とする割合が1952（昭和27）年の調査では59%、1953（昭和28）年では54%、1954（昭和29）年では56%に及んでいる<sup>59</sup>。つまり、単に僻地という理由だけでなく、農漁村の労働力として重宝され、学校教育を受けられない子どもが少なくなかった。

教員一家に育ち、教員生活10年を経ていた川村郁にとって、このような全国的な教育界の動向と、青森県特有の状況については、おそらく十分に理解し、情報を得ていたことであろう。したがって僻地教育の重要性を、肌で感じていたにちがいない。自分が生活する津軽地方において、教師として、どのような働きが必要とされているかということに思いを馳せれば、僻地で働くという選択は、当然浮かび上がってきたはずである。

このような時代と地域の必要性に応え、僻地で人知れず、身を粉にして働いた教師は、僻地校の数だけいたことであろう。川村郁もまた、教育現場の問題を敏感に捉え、その要請に真摯に向き合った教師の一人である。

### 5-3. 病と死の意識

川村郁は、病を抱えていた。彼女は1957（昭和32）年に善光寺平で倒れ、闘病生活を送るが、幾つもの資料が、その際の病名を「糖尿病」と「眼病」と伝えている<sup>60</sup>。しかし筆者は、弟の川

<sup>55</sup> 前掲『青森県教育史 第二巻』（662頁）を参照。この「へき地教育振興法」で僻地は「交通条件及び自然的・経済的・文化的諸条件に恵まれない山間地・離島その他の地域に所在する公立小中学校」（二条）を指す。

<sup>56</sup> 青森県教育史編集委員会編『青森県教育史 第五巻』青森県教育委員会 昭和46年（667頁）

<sup>57</sup> 「東奥日報」1953（昭和28）年11月9日付。

<sup>58</sup> 前掲『青森県教育史 第二巻』（1005-1007頁）

<sup>59</sup> 「東奥日報」1955（昭和30）年6月23日付で、青森県教育庁教育研究所の調査として伝えられている。

<sup>60</sup> 例えば、「手記」のあらましを紹介する1960（昭和35）年12月17日付「朝日新聞」（青森版）の記

村昭男氏から意外な病名を聞いた。昭男氏によると姉の郁は「末端肥大症」を患っていたという。

「末端肥大症」とは、成長ホルモンを作る下垂体の腫瘍によって成長ホルモンが過剰に分泌される病である。成長期に患うと異常に身長が伸びる「巨人症」と呼ばれ、骨の成長が止まってから患うと手足顔が肥大化する症状が見られる「末端肥大症」となる。

川村郁を知る人から、彼女が大柄で、手も足も非常に大きかったという話を聞き知っていたが、それは病の症状によるものであった。昭男氏によると、彼女がこの病を罹ったのは、高等女学校を卒業してからであるという。つまり、成長期を終えた年代での発症である。

川村郁の人生には、「手記」に見られる明るく行動的な面とともに、常に、誰かの病と死が影を落としていたように思われる。父を失ったのは、多感な14歳の頃である、彼女の受洗は、兄悌司の死に関わっている。悌司だけでなく、五男の昭男氏を除く、彼女の五人の兄弟が皆、結核で亡くなっている。さらに彼女自身も、病を患った。高等女学校卒業後に発症したということは、おそらく二十歳前後のことであろう。家族の死に加え、自らが病を発症したことは、いやがうえでも生と死の意味について深く思いを巡らしたのではないだろうか。

昭男氏は、次のようにも語られた。「この病気は当時、奇病と言われ、治療もなく、姉は実験的な治療を受けていた。姉が善光寺平に行ったのはこの病を背負っていたからだと思う。」昭男氏の言われたとおり、僻地教育を望むようになった川村郁の内的な動機には「末端肥大症」発

症の影響があったのであろう。つまり彼女は、自分の死が、決して遠い将来であるとは思わなかったのではないか。このような境遇にあれば、人は自然に、与えられた人生を悔いなく生きたいという欲求を持つのではないだろうか。悔いのない生き方とは何か。受洗を経た彼女は、その答えをイエスの教えの中に探したのであろう。最終的に彼女は、教師として貧窮の僻地に赴き、そこにいる人々の“隣人となり”，人々のために命を捧げ尽くす道を選び取ったのではないか。

## 6. 再び山へ——最後の献身

1957（昭和32）年2月に、川村郁は善光寺平で病に倒れて山を下り、以来1962（昭和37）年11月27日に亡くなるまで、闘病生活を送った。ただし、亡くなった年の9月には、再び善光寺平に赴き、新しく作られた保育所の保母として勤めている。幾つかの資料の記述によると、病気が「一時回復した」ため、再び善光寺平に赴いたとされている<sup>61</sup>。しかし、闘病中に川村郁が

<sup>61</sup> 川村昭男氏が所有するアルバムに、川村郁が亡くなったことを伝える新聞記事の切り取りが張られている。そこに張られた死亡記事には次のように書かれている。「川村郁さん 平賀町善光寺平のカトリック保育園の主任保母として勤務していたが最近病気が再発、黒石病院に入院療養中のところ二十七日午後五時五分死去した。行年三十五才。通夜は三十日夜七時から黒石市山形町の自宅で、葬式は一日午後十時半から黒石カトリック教会で行なう。なくなつた川村さんは十数年教員をつとめ、この間平賀町善光寺平にはじめて分校が開設された際自らすすんで同地に赴任、その熱心な教育態度から開拓民の信望を一身にあつめていたが大病となり神戸で療養したところようやくよくなつて最近黒石カトリック教会が設けた同地の保育園で幼児の保育につとめていた。川村さんの死は各方面からおしまれている。」（日付と新聞社は未確認）また、ケベック外国宣教会のジョリコール神父の追悼文では次のように記されている。「…闘病生活を送つたかいがあつて、一度よくなつてこんどは善光寺平カトリック保育園の保母さんとして山に帰つてから、又々病気が再発し、もう自分は重い重い病気におかされていることを知つていても、最後の最後まで自分の力、のこつていた力をふりしぼつて山のために捧

事には、「糖尿病などのほか目も不自由という難病のため…」とある。またルイ・クパール賞受賞を伝える1964（昭和39）年5月1日付「東奥日報」の記事でも「糖尿病と眼病におかされて下山…」とある。「手記」では「内科的疾患と、半盲目の身を横たえて…」と記されている（「黒石民報」1965（昭和40）年3月10日付）。

母タマに宛てた手紙の記述から、筆者は「一時回復した」という記載に疑問を持つようになった。

この手紙は、川村昭男氏から唯一残っている手紙として見せていただいたもので、神戸医科大学病院に入院中の1961(昭和36)年5月11日付で、治療の様子や入院生活にかかる費用のことについて、便箋六枚にわたり綴られている。前述のように昭男氏は、姉が実験的な治療を受けていたと述べておられたが、この手紙にはその治療が具体的にどのようなものであったかが記されており、昭男氏の言葉をよく理解することができた。治療の様子を記した部分のみ以下に抜粋する。

五月九日(火曜日)に、“日本ブラッツ・バンク神戸支店”に行ってきました。“ブラッツ・バンク”つまり“血液銀行”です。T教授の専門的研究分野である、内分泌の治療の為の新しい試みとして、私達(私とHさんがその対象)から、500cc血液をとり、その中から血漿を取り除き、残りの血球に食塩水を足してもとの500ccにして又体の中に入れるのです。取り除いた血漿の中には、私達に不必要な成長ホルモンが含まれていますので、そのホルモンを今度は成長ホルモン不足の為、大きくなれないでいる人(つまり“小人症”)に注射か何かの方法で体内に入れてやり治療するという“一石二鳥”の方法なのです。今春の“医学学術研究発表会”でT教授が発表したことが大いに話題になり、その研究成果が注目されています。<sup>62</sup>

「末端肥大症」は過剰に成長ホルモンが分泌されることに起因する病気である。現在では、下垂体の腫瘍を除去するHardy法という手術により、成長ホルモンの過剰分泌を源から絶つ治療法が一般的であり、多くの場合完治するという<sup>63</sup>。川村郁が受けていた上述の治療は、成長ホルモンを定期的に体から取り除くという方法により行われた。分泌され続ける成長ホルモンが定期的に除かれれば、理論的には確かに症状を抑えることができたと理解できる。しかしこの治療は、根本的に完治をもたらすものではなく、症状緩和のために成長ホルモンを常に継続的に取り除かなくてはならない。あたかも、水が注がれつづける桶から水が溢れないように柄杓で水をすくい出し続けるようなものである。そこに完治の望みはなく、症状緩和のための努力が生きている限り継続されることになる。

手紙の文面から、川村郁は医師から治療方法の詳細な説明を受けていたことがうかがわれる。治療の過程で彼女は、この治療が病からの解放をもたらすことはなく、症状緩和のために延々と継続される性格のものであることに気が付いたのではないだろうか。いつまでも続く治療は当然、経済的負担を増す。実際に、彼女は同じ手紙で、今後の入院治療費の負担を心配し、母に生活保護法による医療扶助を受けることを相談している。ここから筆者は、川村郁が1962(昭和37)年9月に、「一時回復した」ために善光寺平に戻ったということに疑問を持った。むしろ川村郁は、完治の望みがたたない治療を家計を圧迫しながら継続するよりも、自分に残された最後の力と時間を、かつて一生を賭けよう

げたのです。そして善光寺平カトリック保育園開園の労を一手に引き受けとうとうその開園を実現し、子供からも親からも心底から慕われていたのです。」(追悼記事 R・ジョリコール神父「善光寺平の川村先生(下)＝第二の蟻の町のマリア＝」  
<sup>62</sup> 川村昭男氏所有の手紙から抜粋。ただし人名はアルファベットに変えてある。ちなみに、手紙に記されている「日本ブラッツ・バンク」とは、後の「ミドリ十字」である。

<sup>63</sup> 「末端肥大症」の治療法に関して八戸大学教授で内科医の遠藤守人先生に所見を仰いだ。現在「末端肥大症」の治療としては、下垂体の腫瘍を除去するHardy法という手術が一般的で、ほぼ手術で完治するケースが多いという。その後、Hardy法について調べたところ、この治療法が普及したのは1960年代後半からであった。つまり、川村郁が治療を受けた頃にはHardy法による手術はまだ行われていなかったことになる。

とした善光寺平開拓地の人々のために捧げようと決めて、再び山に登ったのではないだろうか。「一時回復」ということは、実際には、周囲の人々に心配をかけまいとして川村郁が語った退院の理由説明であったように思われるのである。

このように推察しうもうひとつの根拠は、川村郁の人柄である。ケベック外国宣教会のジョリコール神父の追悼文には、彼女の人柄について次のように記されている。

川村先生は、自分の苦しみを絶対に外に表さない方でした。おなくなりになるその時間まで自分の苦しみを顔の一つとして表わさなかつたのです。御臨終の十分前、ベツトのまわりに善光寺平開拓の方、お母さん、妹さん、弟さん、神父さん方がたくさん見舞っていた時は、すごく元気な顔を私たちに見せ、初めから終りまでにここにしておいでになつて、この調子だと今夜は家へ帰つても安心して休めるところだと思つていたところ、一同が見守つている中で、何の恐れもなく急に様態が悪化して、全身が見る見る白くなり、静かに静かに合掌したまま天国に召されてしまったのです。川村先生は全く（数文字分、印刷不鮮明で読めず）で自分の苦しみを人には見せなかつた。いつもここに顔のその人だつたと思います。<sup>64</sup>

川村郁が自ら治療を続けることを止め、善光寺平開拓地の人々に自分の残された命を捧げ尽くすために再び山に上がったとすれば、その献身的な最期は「殉教」と呼ぶにふさわしいのではないだろうか<sup>65</sup>。「わたしがあなたがたを愛し

たように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」<sup>66</sup> という教えを、彼女は身を以て証したからである。

## 結 び

青森県津軽地方で僻地教育に献身した教師川村郁の人生を、ここまで資料をもとに跡づけてきた。善光寺平のある開拓者は、川村郁について「あの人は、神様みたいな人です。」<sup>67</sup> と回想している。一般に、聖者と讃えられる者の人生には、その聖性や美しい行為の背景に、人間的な苦悩や受難が普通の人以上に潜んでいたと考えることができる。川村郁の人生にも、「手記」に見られるような明るさとは裏腹に、諸種の苦しみと受難の道のりが見出された。彼女を直接知る数少ない人々の脳裏に、今も忘れられない人として記憶に残っているのは、そのためであろう。現在、善光寺平開拓地の人々が居住している一本木平地区には、亡くなった開拓者たち

---

福・列聖された者の他に、我々には知られないが神の目から見て信仰に殉じた者は無数に存在する。川村郁もその一人であると筆者は考えている。

<sup>66</sup> 「ヨハネによる福音書」15章12-13節。なお、上述のジョリコール神父の追悼文にはこの聖書の箇所とともに「ヨハネによる福音書」10章11-15節が引用されている。「一度、善光寺平に足を踏みこんだ川村先生はもう身も心も一切（印刷不鮮明箇所）捨てて山の人の幸福のためにささげたのです。聖書ヨハネ十章の十一節に「私は、羊たちに生命を、豊かな生命を与えるために来た。私はよい牧者で、よい牧者は羊のために生命を与える。牧者でもなく、自分の羊をもたないやとい人は、狼が来るのをみると、羊をすててにげ、羊は狼にうばわれ散らされる。彼はやとい人で、羊のことを心にかけない。私はよい牧者で、自分の羊を知っており、私の羊もまた私を知っている。それは、父が私を知り、私が父を慕っているのと同じである」とのべている。川村先生は全くこのよい牧者の実践の人でありました。」

<sup>67</sup> 前掲『開拓三十五年の歩み』（23頁）「苦しかった・楽しかった入植当時の思い出」というタイトルの座談会における葛西萬太郎氏の発言である。

<sup>64</sup> 昭男氏所有のアルバムに張られた「善光寺平の川村先生（上）＝第二の蟻の街のマリア＝R・ジョリコール神父」というタイトルの記事切り抜きからの抜粋。新聞社と日付は未確認である。引用文の文末は、「ここに顔そのものの人だつた」の誤りと思われる。

<sup>65</sup> 古典的な「殉教」理解は、信仰を理由に殺害された人々を指すが、現代では「殉教」の概念は広く解釈されている。その人生に光が当てられ列



の墓の傍らに分骨された川村郁の墓がある<sup>68</sup>。8月のお盆過ぎにそこを訪れたとき、白いペンキ塗りの木製の十字架が控えめに立っており、花が供えられていた。その質素な佇まいに、筆者は心を打たれた。

川村郁の功績は注目されて然るべきと思う。一方で我々は、川村郁を知ることによって、人知れず僻地の教育に身を捧げた他の多くの教師が存在したことに目を向ける必要もある。当時、彼女だけが特別に崇高な教育者であったと言うことはできない。川村郁の偉業に光を当てる際、我々は同時に、他の名もない教師たちの同様の偉業に思いを寄せなければならない。そしてそのような人々の中にカトリック信仰に基づいて献身的に働いた人物がいたことを喜ぶべきであろう。このような見方は、彼女の固有の価値を低めるものではない。かえって、我々に知られることなく、神の目から見て価値ある生き方をした者が無数に存在するという事実を顧みることは、極めて重要である。キリスト教の世界観は、そのような目に見えない者どもとの交わりを大切にしている。その意味で、川村郁を知ることはいかに意義があると思う。

今後の課題として、善光寺平に黒石カトリック教会の分教会を建てたケベック外国宣教会の宣教師たちの活動の詳細の調査や、まだお話をうかがっていない川村郁を直接知る方々に対する取材が残っている。それらの結果は、今回紙幅の都合で掲載できなかった写真とともに、別の機会に記したい。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり多くの方のお世話になった。とりわけ「手記」の入手のためにご尽力下さった八戸塩町・鮫町教会の首藤正義神父様、弘

前のオタワ愛徳修道女会シスター熊谷みわ子様、弘前教会のデュベ神父様、「手記」の複写を提供して下さいた弘前教会の太田トキ様、資料収集の他、取材の案内役を引き受けて下さった今井則三様、そして快く取材に応じて下さり貴重なアルバムやお手紙まで貸して下さいた川村昭男様のお力添えがなければ何も出来なかった。また八戸大学人間健康学部教授遠藤守人先生は末端肥大症の治療に関して丁寧にご教示下さった。深く感謝申し上げます。

## 主要参考文献

- ・青森県教育史編集委員会編『青森県教育史資料 篇第5巻』青森県教育委員会 1971年
- ・青森県教育史編集委員会編『青森県教育史記述 篇第2巻』青森県教育委員会 1974年
- ・小野忠亮『青森県とカトリック宣教百年史』百年史出版委員会 1982年
- ・川村郁「山の子らのために——へき地教育に情熱をささげ途中でたおれた一女性教師の手記」『黒石民報』(昭和40年3月9日～5月2日連載)
- ・黒石人物伝編集委員会編『黒石人物伝』黒石市教育委員会 1992年
- ・ケベック外国宣教会日本宣教50年に感謝する記念事業委員会『からしだね』本町カトリック教会 1998年
- ・善光寺平生産組合『開拓三十五年の歩み』津軽新報社 昭和62年
- ・平賀町誌編集委員会『平賀町誌』平賀町 1985年
- ・松居桃樓『アリの町のマリア北原怜子』春秋社 1998年(新版)

\*本稿は2007年9月8日に上智大学で開催された日本カトリック教育学会第31回全国大会で口頭発表した原稿に加筆したものである。

<sup>68</sup> 川村郁の墓は、黒石カトリック教会の霊園と善光寺平開拓者が住む一本木平地区に分骨されている。